

令和元年6月17日現在

機関番号：33808

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13493

研究課題名(和文) 擬人化研究の知見を応用した心理的問題の理解と共有を促す技法の開発

研究課題名(英文) Development of techniques to promote understanding and sharing of psychological problems by applying the findings of anthropomorphic research

研究代表者

波多野 純 (Hatano, Jun)

静岡英和学院大学・人間社会学部・教授

研究者番号：10311953

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、心理的問題の理解と表現を促進するために擬人化のメカニズムを応用することであった。文献研究を通じて、擬人化は対象への理解や親密感を高める手段となる可能性を指摘した。次に多様な心理的問題を擬人的に表現している言語的資料を収集し、定性的な分析を行った。その結果、自分の否定的側面よりも肯定的な行動が、年少者のふるまいとして擬人化されることが多いとの事実が示された。さらに、自分の不安や怒りを擬人化して理解する実験により、擬人化が否定的感情の理解を常に容易にするとは限らないことが示された。本研究によって、擬人化を心理的援助に応用するための技法開発に実証的基礎を提供することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

擬人化は、人文・社会科学のみならず、情報学やロボット工学の研究とも成果の共有が可能な学際的領域であり、多方面での応用可能性をもつ現象である。本研究は、擬人化のメカニズムに関する認知・社会心理学の基礎研究と、その知見を臨床場面に導入する応用研究の側面を持ち、両方に貢献するものであった。また、従来の擬人化研究で扱われたことのない心の問題の擬人化を記述する初めての研究となった。人間の心理的作業の支援を目指すコンピュータ科学などの分野に新たな知見を提供し、応用研究を促進すると思われる。さらに、子どもから高齢者まで多様な人々の問題理解を容易にする新たな臨床実践のツールの開発につながる研究となった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to apply anthropomorphic mechanism to promote understanding and expression of psychological problems. Literature review showed that anthropomorphism could be a means to enhance the understanding and familiarity with the subject. Next, we collected anthropomorphic verbal data that expressed various psychological problems and conducted qualitative analysis. Result showed that positive behavior rather than one's negative side was often anthropomorphized as the behavior of the younger ones. Furthermore, experiments to anthropomorphize and understand one's anxiety and anger showed that anthropomorphism does not always facilitate understanding of negative emotions. This study can provide an empirical basis for the development of techniques for applying anthropomorphism to psychological support.

研究分野：社会心理学

キーワード：擬人化 問題の外在化

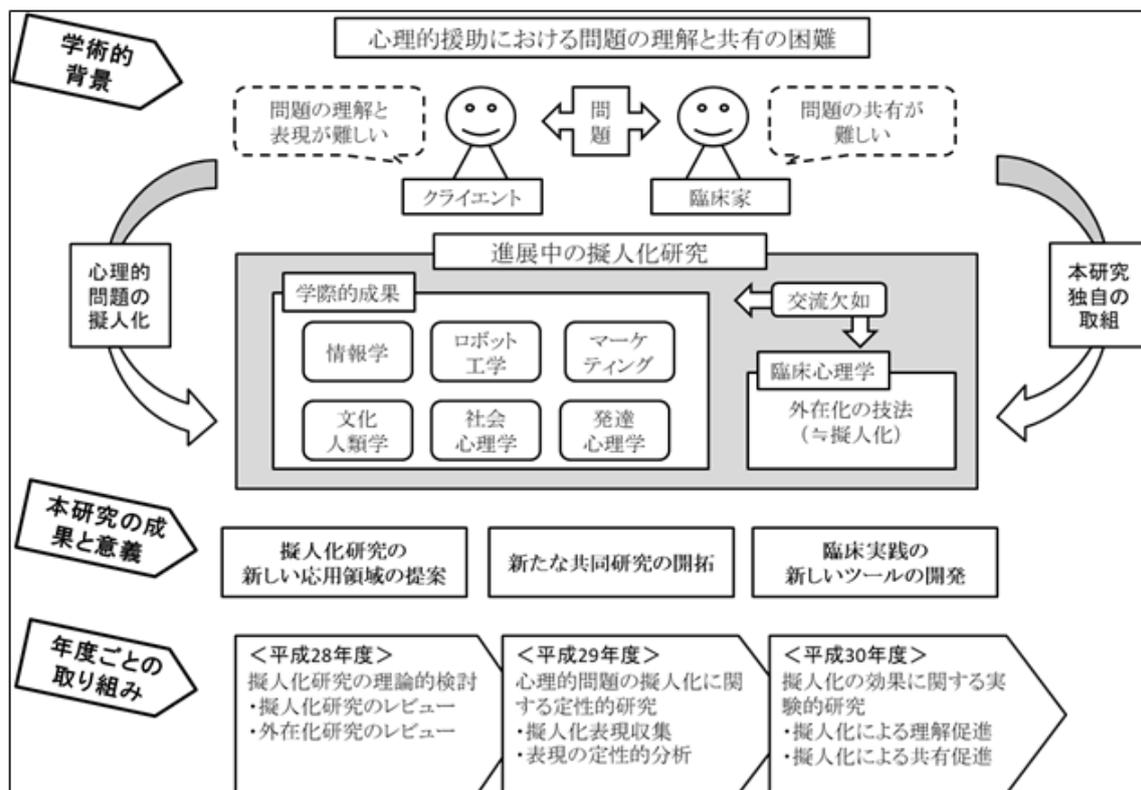
様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

クライアントにとって、心理的不安や苦痛を認識し他者に説明するのは、難しい作業である。心理的援助の査定段階で必須となるこの作業を、簡便に実施する方法があれば非常に有益である。「外在化」という技法は問題を擬人化してクライアントから分離し扱いやすくする効果に注目しているが(Morgan, 2009, What is narrative therapy? Dulwich Center Publications), そのメカニズムは解明されていない状況であった。しかし、擬人化に関する研究が他分野で急速に進展し、学際的領域を形成しつつあった。従来は文学や発達心理学における比喩的思考・表現が主な研究対象であったが、1990年代に入るとコンピュータ科学やロボット工学の領域で「擬人化エージェント」の概念が登場し、機械や仮想空間上の対象と親密な関係を築くためのメカニズムとして注目されるようになった(Duffy, 2003, Anthropomorphism and the social robot. Robotics and Autonomous Systems,42,177-190)。社会心理学も「人間らしさの知覚」の問題として研究が盛んとなり(Epley et al., 2007, On seeing human. Psychological Review,114,864-886), 現在も活発に研究が続いている。研究開始当初は、研究の活発化に伴って擬人化エージェントによる相談システムの構築(江刺ほか,2010)や、感情労働の代替を目指した機器の開発(大澤,2014)など心理的援助に関連する試みも登場していた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、社会心理学やロボット工学、文化人類学など広範な分野で近年注目を集めている擬人化研究の知見を、心理的援助の領域に導入し、クライアントの問題理解と表現を促進するメカニズムとして検討することであった。擬人化は対象に人間的な特徴を知覚して理解や親密感を深める手段として期待されているが、心理的援助場面への応用研究は進んでいなかった。心理的援助において、クライアントが自分の問題を明確に把握して援助者と共有することは、援助の有効性を左右する重要かつ困難な課題である。擬人化研究の知見は、この課題を円滑に進めるための技法の開発に実証的基礎を提供すると思われた。そこで、クライアントが複雑な心理的問題を擬人化することで、問題の理解や表現、共有が促進されるかを検討し、学際的研究に新たな課題を創出することを目指した（研究の全体像は図1の通り）。



3. 研究の方法

本研究は3年間を要する計画であり、その計画に従って実施された。

【平成28年度：擬人化による心理的問題の理解と表現に関する理論的検討】

平成28年度は、擬人化研究および心理的援助における問題の外在化に関する文献レビューを行うとともに、心理的問題の擬人化を促す技法について理論的な検討を行った。

【平成29年度：心理的問題の擬人化に関する定性的資料の収集と分析】

平成29年度は、多様な心理的問題を擬人化によって表現している言語的資料を収集し、定性的な分析を行った。

調査協力者 大学生 29 名(男性 15 名, 女性 14 名)

課題 秋田(1996)の比喩生成課題と Morgan(2000)の「外在化する会話」(訳書 p. 34)を参考にして, 自分の心理的特性を擬人的に表現させる課題を作成した。具体的には, 「あなたの心の中に, 人の姿をした『良い存在』や『困った存在』がいて, あなたの良い行動や困った行動は, その存在のせいであると想像して下さい。そのイメージをもとに, (A)あなたの中にどんな人(存在)がいて, (B)その人があなたにどんな行動をさせるのか, (C)それは特にどんな時なのかを, 下の例のような文章で表現して下さい。」と教示し, 次の2つの文章を例示した。1つ目は, 「私の中には(A)幼稚園の男の子がいます。(B)彼は私を人なつっこくさせます。それは特に(C)私が年上の人と話す時です。」2つ目は, 「私の中には(A)イライラした女子中学生がいます。(B)彼女は私を怒りっぽくさせます。それは特に(C)私が友達と共同作業をする時です。」であった。2つの例文の後に4つの文章を作成し, 上の(A)~(C)のように分けて記述するよう求めた。

【平成 30 年度: 心理的問題の擬人化が問題の理解と共有にもたらす効果についての実験的検討】

平成 30 年度は, 前年度の定性的分析から得た仮説をもとに, 不安や怒りなどの心理的問題を擬人化することに関する効果と問題点を実験的に検討した。

参加者 大学生 36 名(男性 21 名, 女性 15 名)を対象に質問紙実験を行った。

発話生成課題 2 者間の対話場面における発話を生成し記述させる課題を作成した。課題は, 不安と怒りがそれぞれ自分にどのような影響を及ぼすかについて参加者に説明を求める4つの独立した対話場面で構成されていた。4つの対話場面のうち, 2つの場面では不安や怒りの影響について擬人化表現を求めた。別の2つでは, 同じく不安や怒りの影響をたずねたが, 擬人化表現を求めなかった。

課題の難しさの評価 課題の後, 生成がもっとも容易だと感じた発話と, もっとも難しいと感じた発話を, それぞれ1つずつ選択させた。さらに, 不安や怒りが自分に及ぼしている影響をもっとも理解できたと感じた発話を1つ選択させた。

4. 研究成果

【平成 28 年度: 擬人化による心理的問題の理解と表現に関する理論的検討】

近年の擬人化研究の成果を展望し, 擬人化を心理的なツールとして2つに分類することができた。1つは理解のツールとしての擬人化(未知の対象の理解)であり, もう1つは親密化ツールとしての擬人化(感情への影響)であった。

【平成 29 年度: 心理的問題の擬人化に関する定性的資料の収集と分析】

29 名の調査協力者から 111 個の表現が収集された。収集された比喩表現を, 擬人化に用いられた素材(ソース)と表現された行動特徴(ターゲット), およびその特徴が顕在化しやすい状況ごとに区別して分析を行った。

擬人化を用いてどのような行動特徴が表現されたかを, 記述内容をもとに, 内容が肯定的なものか否定的なものか(肯定/否定)と, 記述されているのが行動に関するかどうか感情に関するかどうか(行動/感情)に分類し, それらを組み合わせる4つのカテゴリに整理した。カテゴリごとの出現頻度を用いてカイ二乗検定を行ったところ, $\chi^2(1)=15.46, p<.01$ であった。擬人化する対象として選択された特性は, 否定的な内容よりも肯定的な内容の方が多く, 感情的なものよりも行動的なものの方が多かった。自分の肯定的な行動に関する記述がもっとも多かった(表1, 表2)。

表1. 擬人化の対象となった特性ごとの出現頻度

	行動	感情	計
肯定的	48	10	58
否定的	24	29	53
計	72	39	111

表2. 年代×特性ごとの出現頻度

	年長者	年少者	同年代	年代なし	計
肯定・行動	18	12	6	12	48
肯定・感情	4	4	1	1	10
否定・行動	4	12	0	8	24
否定・感情	4	15	4	6	29
計	30	43	11	27	111

【平成 30 年度: 心理的問題の擬人化が問題の理解と共有にもたらす効果についての実験的検討】

実験参加者 36 名のうち, データ使用に関する同意が得られなかった男性 1 名のデータを分析

から除外した。その結果、35名(男性20名、女性15名)のデータが分析に用いられた。発話生成課題の難しさの評価について、もっとも生成が容易だと感じた発話として選択された課題を対話場面ごとに数え、記述対象となる感情(不安・怒り)と対話において求められた表現(擬人化・非擬人化)の組み合わせにより整理した。発話がもっとも難しいと感じた発話についても同様の整理を行った(表3)。

表3. 発話生成に関する条件ごとの評価

	不安・ 非擬人化	怒り・ 非擬人化	不安・ 擬人化	怒り・ 擬人化
生成が容易	14	16	4	1
生成が困難	4	4	12	15
理解が深まる	11	15	6	3

不安や怒りが自分に及ぼしている影響をもっとも理解できたと感じた発話について、上と同様の整理と分析を行ったところ、「不安・非擬人化表現」条件を選択した参加者は11名、「怒り・非擬人化表現」は15名、「不安・擬人化表現」は6名、「怒り・擬人化表現」は3名であった(表2)。自分に及ぼす影響をもっとも理解できた対話場面が、参加者に擬人化表現を求めていたかどうかで整理すると、非擬人化表現条件は26名、擬人化表現条件は9名であった。2項検定により、非擬人化表現の方が、有意に自分への影響を理解できる課題として選択されていた($p<.01$)。

不安や怒りが自己にどのような影響を及ぼすかについて、擬人的な表現を求める教示と、非擬人的な表現を求める教示を実験参加者に提示し、表現のしやすさと困難さ、自己理解の深まりについて比較を行った。その結果、擬人化表現は感情の影響を把握し表現する作業を必ずしも容易にするものではなく、直接的な質問によって感情の影響を語らせる方が発話を生成しやすいと感じられていたことが示された。この結果は、外在化過程での擬人化の複雑さを示唆するものであると同時に、擬人化を求めることによってそれ以前には持っていなかった視点で感情の影響について考えることを促したとも考えられる。このような効果を考慮し改善を進めれば、簡潔な教示によって擬人化・外在化を促し、心理的問題を多面的に理解していく方法を構築できよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

① 波多野純 2019 不安および怒りの影響の理解に及ぼす擬人化の効果 静岡英和学院大学・静岡英和学院大学短期大学部紀要, 17, 1-6.

(<http://www.shizuoka-eiwa.ac.jp/media/kiyou17-4.pdf>)

② 波多野純 2018 外在化に見られる擬人化表現の質的分析 静岡英和学院大学・静岡英和学院大学短期大学部紀要, 16, 1-8.

(<http://www.shizuoka-eiwa.ac.jp/media/kiyou16-4.pdf>)

③ 波多野純 2017 心理的問題の擬人化に関する研究の展望 静岡英和学院大学・静岡英和学院大学短期大学部紀要, 15, 1-8.

(<http://www.shizuoka-eiwa.ac.jp/media/kiyou15-2.pdf>)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：小堀 彩子

ローマ字氏名：Kohori Ayako

所属研究機関名：新潟大学

部局名：人文社会科学系

職名：准教授

研究者番号(8桁)：00432188

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。